

新春随想

「令和3年度へき地医療貢献者表彰」を受賞して —地域医療における白内障手術—



日野病院名誉病院長 玉井 嗣彦

新年明けましておめでとうございます。皆様におかれましては、晴れ晴れと希望に満ちた新年をお迎えになられたことをお慶び申し上げます。

文字通り「光陰矢の如し」です。月日のたつのは早く、子年生れの私は、満86歳の誕生日を1月2日に迎えました。鳥取大学を定年退官後、ご縁があって日野病院に名誉病院長として勤務させていただいてから、恙無く元気で、21度目の新春を迎えました。心より感謝申し上げます。

その間、私にとって大変名誉で忘れ難い思い出の一つとして、昨年9月9日に思いがけず全国自治体病院開設者協議会（平井伸治会長）及び公益社団法人全国自治体病院協議会（小熊豊会長）から、「令和3年度へき地医療貢献者表彰」の荣誉にあずかり感激しています。去る10月27日に、日野病院組合管理者の埜田淳一日野町長様から両協議会会長様からの立派な表彰状と記念品を賜わり、あらためて感激しております。両協議会の皆様、ご推薦をいただきました病院関係者の皆様に、あらためて心より感謝申し上げます。

名誉病院長とはいえ、専門は眼科ですので、住民の健康管理と福祉向上にどの程度貢献できたかは定かではありません。

私は微力ながら、健康寿命を損わせる危険因子の一つに「視力障害」がありますので、“成人眼科検診”の重要性などを指摘しながら日常眼科診療に取り組んできました。多くの機会を通じて、視力障害を有するグループは認知機能が低いこと、心理的な負担、うつ状態をも増加させることなどが報告されており、健康寿命をめざす「積極的予防医学」のテーマとして「視力障害の有無」の検索とその対策は、避けて通れないものとなっているからです。なかでも、高齢化に伴う加齢白内障は、日常もっともポピュラーな目の病気になっています。

令和3年12月末で手術開始丸20年3カ月が経過した今日、その間手術室では2760件の加齢白内障手術を施行しました。

独居老人や家族の介護が十分に受けられない患者さんの場合には、術前・術後の管理体制が疎かになり、手術予後が悪い場合も少なくありません。それを避けるために、白内障手術希望のすべての皆様に、山間へき地の交通の面も含めて原則片眼で1週間、両眼で2週間前後の入院手術を行ってきました。

うつ病や認知症がある患者さんへの白内障術後のQOV（視覚の質）・QOL（生活の質）の改善は、患者自身のみならず、その介護者のQOLをも向上させることでしょう。したがって高齢化社会においては、この種の利点を考慮しながら、今後も入院での白内障手術を積極的に展開していきたいと思えます。



現在の日野病院での日常眼科の診療・手術に関しては、眼科専門医といえども私一人ではできるものではなく、母校鳥取大学の井上幸次教授はじめ、多くの医局の先生方の長年にわたる絶大なご協力・ご支援のおかげと感謝申し上げる毎日です。今後も絶大なご支援をお願い申し上げます。

日野病院よ、永遠なれ!!